

栃木市都賀町愛宕塚古墳の低位置突帯埴輪

おか やま りょう こ そ が ま み こ
岡 山 亮 子・曾 我 真 實 子

はじめに

- 1 遺跡の位置及び概要
- 2 栃木県内の低位置突帯埴輪と愛宕塚古墳の位置付け
- 3 資料報告

4 分析

- 5 考察
- おわりに

栃木市都賀町木所在の愛宕塚古墳より採集された未報告の低位置突帯埴輪について報告する。本資料群で完形品は無い。しかし未報告であること、従来の低位置突帯埴輪の集成ではみられない赤津川流域に所在すること、旧都賀町で唯一の前方後円墳から出土したことから資料報告をおこなうこととした。また低位置突帯埴輪は類例が多くない。そのため筆者の覚え書きとして、低位置突帯埴輪の分析・検討をおこなった。

はじめに

今回報告する資料は、栃木市都賀町木に所在する愛宕塚古墳⁽¹⁾ から採集された埴輪である。県道栃木栗野線拡幅工事の際に墳丘西側裾部より採集され、栃木市都賀歴史民俗資料館の収蔵庫内に所蔵されていた。本資料は栃木市教育委員会が主体となって実施した栃木市遺跡分布調査の際に存在を確認し、調査に参加した國學院大學栃木短期大学が部分的に整理作業を行った。また、筆者も調査補助員として調査に参加していくため本資料の整理報告を行うこととなった。埴輪は段ボール2箱に水洗されずに収容されていた。後述するが、資料は底部から口縁部まで一連の完形資料は無く、全体長は把握できない。しかし、底部の観察から低位置突帯⁽²⁾ を有する埴輪が含まれていることが判明した。また愛宕塚古墳は、旧都賀町で唯一の前方後円墳で、墳長80m級の可能性を指摘される重要な古墳でありながら史跡指定や墳丘測量がされていない。そのため西側は道路に、北側は葬儀場及び墓地により削平を受けている。本古墳の位置付けをおこなう必要がある。そして出土した埴輪は従来の研究で集成されている低位置突帯埴輪の分布では確認されていない。そのため所蔵資料の中から報告遺物を抽出し、紙面の許す限り拓本・実測図及び事実記載の報告をおこなう。また低位置突帯埴輪について検討するために、本資料のハケメ及び第一段突帯について分析し、若干の考察をおこなう。

1 遺跡の位置及び概要

愛宕塚古墳は、赤津川左岸に位置する。西側には丘陵が広がり、この丘陵端部には市指定史跡の華厳寺跡などの古墳時代から近世までの遺跡が数ヶ所所在している。現在の赤津川の東側は水田が広がる沖積地となっているが、本古墳に祀られている愛宕神社の敷地が現行の県道より若干の高地であることが確認できるため、県道で切断された西側裾を含む周辺地形は宅地や県道による削平を受けている可能性が高い。

愛宕塚古墳の北側には木村古墳群の存在が周知されていたが、現在では行人塚古墳のみしか確認できない。平成7年におこなわれた栃木県教育委員会の確認調査では、竪穴住居より古墳時代後期の土器がまとまって

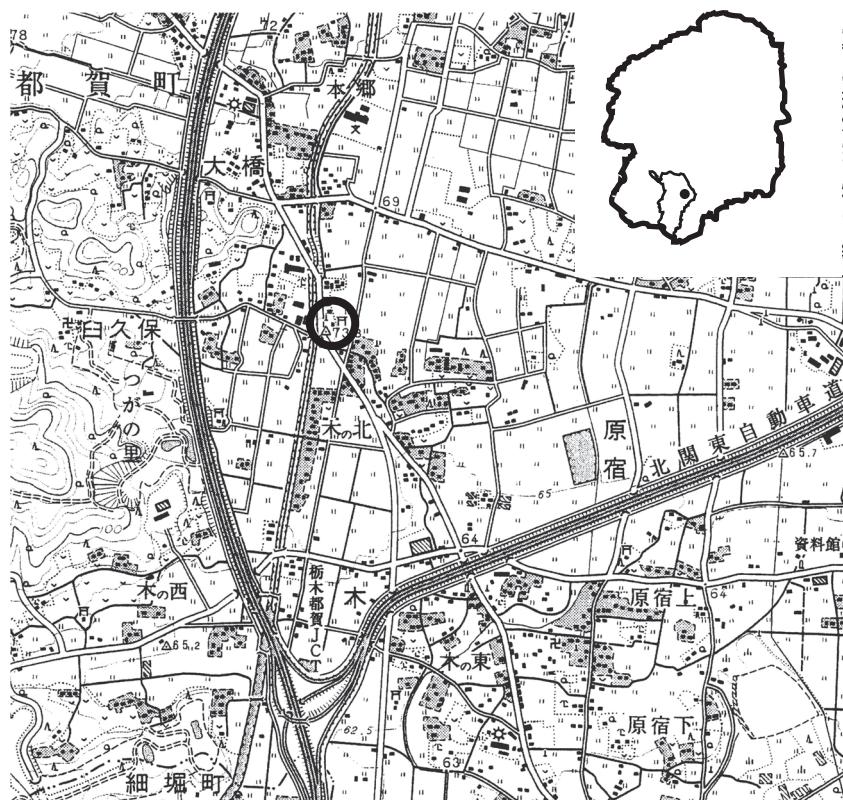


図 1 遺跡の位置

出土している。遺構外から馬形埴輪が出土しており、木村古墳群内に形象埴輪を持つ古墳が存在していたことが確認された（江原・大野 2014）。また、栃木市教育委員会が平成 23 年～26 年にかけて遺跡詳細分布調査を行い、旧都賀町を含めた栃木市の遺跡及び埋蔵文化財包蔵地を確認した（栃木市教育委員会 2015）。しかし、発掘調査の事例は多くはなく、愛宕塚古墳周辺の様相は明らかになっていない。

今回報告する資料は、都賀町史に記載がある西側裾部分を通る県道工事の際に出土したものである。しかしそれ以後は、墳丘測量や発掘調査は実施されておらず、愛宕塚古墳については未だ不明な点が多い。前述の通り、旧都賀町では唯一の前方後円墳であり、全長は 80～90 m、高さ 3～8 m と考えられている大型の古墳である。内部主体については、平成 27 年の栃木県重要遺跡確認現況調査にて周辺住民より石室の中に入ったという証言があり、後円部の窪みに横穴式石室がある可能性を指摘している（津野 2015）。遺物については、同調査と本報告資料以外は確認されていない。現況では埴輪片が採集できるが、土師器や須恵器等遺物は確認できない。墳形や墳長から本古墳は、当該地域の首長墓であり栃木県内でも重要な古墳の一つである。

2 栃木県内の低位置突堤埴輪と愛宕塚古墳の位置づけ

低位置突堤埴輪の研究史及び論説は小森哲也の論文に詳しい（小森 2015）。同論文においても集成がされているが、本古墳の他にも、低位置突堤埴輪の例が増加したので、分布図を作成した（図 2）。様相に関して既存の研究と大きく変わった点はない。伝来品である大和久古墳群例を除けば、本古墳を含めて鬼怒川以西の県南地域から出土する。古墳出土例は 15 例、表採や遺構外出土は 6 例、窯跡からの出土は 1 例の計 22 例となっている。栃木県は非常に多くの河川が流れている。中村享史が、「河川は両岸を結びつけるものと

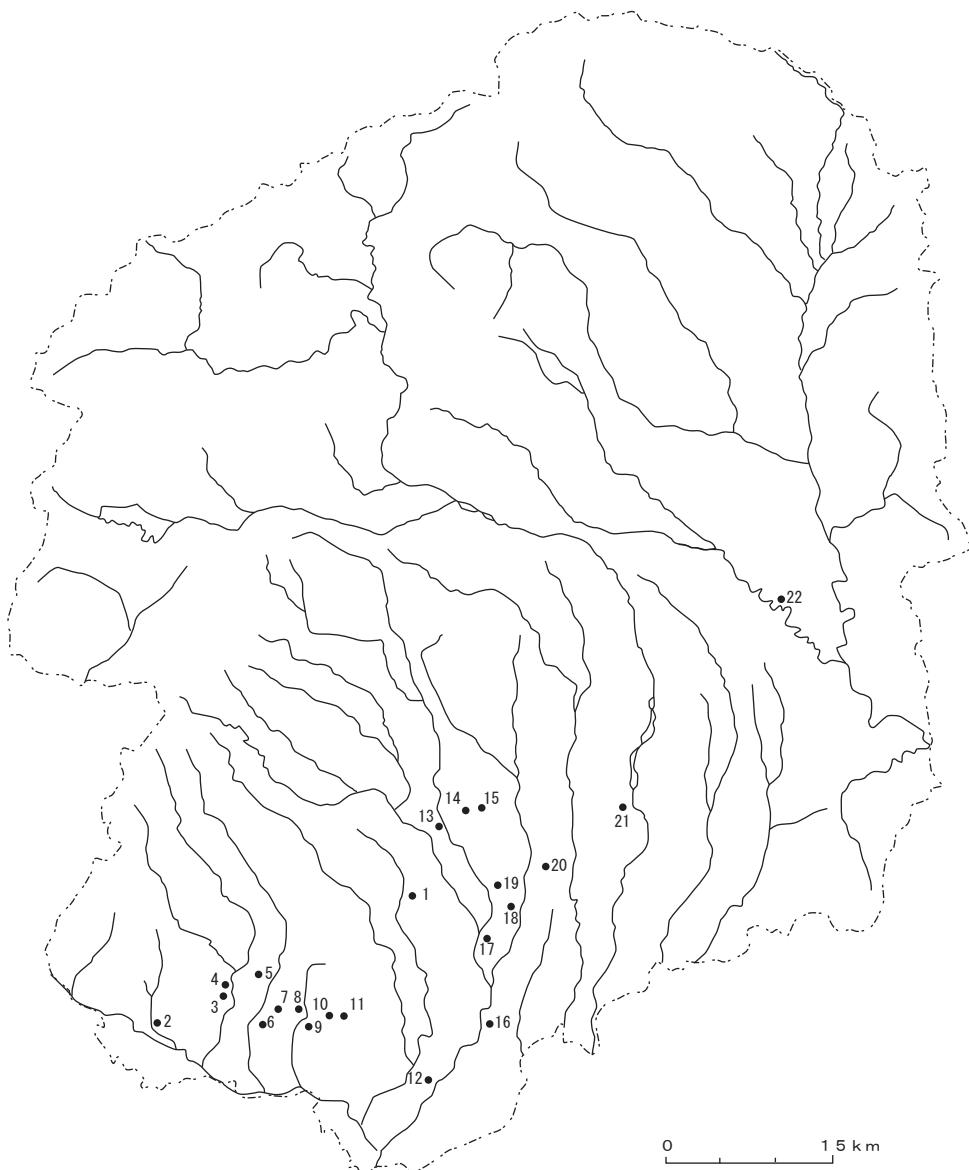


図2 栃木県における低位置突帯埴輪の分布

- 1 愛宕塚古墳 2 口明塚古墳 3 小峯山2号墳 4 中山8号墳 5 一瓶塚稻荷神社古墳 6 佐野城 7 唐沢ゴルフ場埴輪窯跡
 8 米山東古墳 9 黒袴台遺跡 10 岩舟甲塚古墳 11 畠岡遺跡 12 観音山古墳 13 判官塚古墳 14 羽生田茶臼山古墳
 15 羽生田富士山古墳 16 足尾塚古墳 17 国分寺甲塚古墳 18 星の宮神社古墳 19 みぶ車塚古墳 20 石橋横塚古墳
 21 橋本古墳 22 大和久古墳群

見なされており、境界と見られることはない」としているが（中村 2015）、そのため鹿沼市判官塚古墳（13）や壬生町羽生田茶臼山古墳（14）など同一河川流域から出土することも多い。しかし愛宕塚古墳が立地する赤津川流域においては、他に低位置突帯埴輪の出土例がない。赤津川流域では他に西方山6号墳等が所在するが、出土しているのは普通円筒埴輪である（秋元 2016）。従来の研究史においては、岩舟甲塚古墳（10）が立地する三杉川と、観音山古墳（12）が立地する思川流域の間は、低位置突帯埴輪の空白地帯と考えられていたが、赤津川流域でも出土したことから、県南地域において地域差なく古墳に導入されていたと考えられる。

3 資料報告

所蔵されていた 184 点の埴輪片から今回報告する資料点数は 103 点である。接合した結果、そのうち 53 点の実測図及び拓本を報告する。なお、今回報告しない資料についても水洗及び注記作業⁽³⁾は行った。実測図については、反転復元が可能なものに関しては、復元した実測図を記載した。

前述しているが、本資料群には完形資料はない。残存度の高いものでも底部から第二段突帯までを確認できるのみである。資料の内訳は胴部片が最も多く、次いで底部、口縁部の順に続く。また、形象埴輪の可能性がある個体も何点か確認した。底部については全点が低位置突帯を持つ個体である。栃木県内の埴輪に関しては、佐野市唐沢ゴルフ場埴輪窓跡と壬生町羽生田が産地として知られている。愛宕塚古墳の資料の胎土は既出の窓跡とは異なるが、焼成が不良であるという特徴から唐沢ゴルフ場埴輪窓跡系の埴輪である可能性が高い⁽⁴⁾。本資料は、各個体で明瞭な胎土の違いはない。焼成も不良なものがほとんどである。一部胎土に雲母を含む個体が確認できたが極々微量なため、観察表には記載しなかった。また調整では、今回報告する資料には外面に縦ハケが施されているが、小森哲也氏採集品の中には横ハケが施されている個体があった。底部資料の中には製作時に敷いていたであろう植物の圧痕が残っている個体が何点かあった。埴輪底部の植物圧痕については高岡正之が壬生町富士山古墳出土の資料 1～3 の 3 個体で植物の同定をおこなっている（高岡 1998）。その中で、節や葉鞘がない幅 9.0mm～14mm の平行した圧痕が幅 10cm 間隔で並ぶ特徴を持つ植物はササ類であると断定している。今回報告する資料の圧痕も幅 1mm 前後のものが多く、また節などがみられる資料はみられなかった。そのため富士山古墳出土例にみられるササ類ではないかと推定する。それでは以下に主要な個体に関して記載する。

(1) 円筒埴輪 (1～5)

反転復元が可能な個体は 5 点である。1 は低位置突帯埴輪である。底部から第一段突帯までは約 2 cm である。底部が他の個体と比べて非常に厚く、3.5～4.0cm である。底部から第二段突帯までを確認し、同一個体である突帯を持つ胴部片があることから 3 条以上の埴輪であることがわかる。底部に植物圧痕が確認できる。突帯は台形状である。2 は低位置突帯埴輪である。底部から第一段突帯まで残存している。底部から突帯までは約 2.5cm、底部の厚さは 2.7～3.4cm である。突帯は幅が約 1 cm と狭く長く、上辺が突出する短矩に近い台形である。底部の突帯を貼り付けた粘土を底部下部まで貼り付けた痕跡が観察できる。底部の製作方法は不明である。3 は円筒埴輪の胴部である。外面は過焼成により硬質であるが内面は焼成不良で脆弱。突帯は台形状である。外面はハケ状工具で縦ハケを施した後に突帯を貼り付けている。突帯は上部を丁寧なナデで貼り付け、上面と下部はナデで調整している。4 は低位置突帯埴輪で、今回の報告資料のうち最も残存度が高い。2 条の突帯を確認した。底部から第一段突帯までは 2.2～2.7cm、底部の厚さ 2.0～2.5cm である。突帯は台形状で低い。高さ約 10cm の粘土板で基部を成形し、その上を粘土紐で輪積みをしている。突帯については縦ハケの後、貼り付けている。突帯の上部はナデで下部はケズリもおこなっている可能性もある。上面についてはナデで調整している。他の個体に比べ、比較的に丁寧に突帯の貼り付けをしている。底部に植物圧痕が確認できる。5 は低位置突帯埴輪である。2 条の突帯を確認した。底部から突帯までは約 2 cm、底部の厚さは 2.1～2.5cm である。2 枚以上の板状粘土を組み合わせて成形し、低い台形状の突帯を貼り付けている。突帯の上部はナデによりしっかりと貼り付けているが、下部はナデが甘く突帯が基部に完全に張り付いていない。内面の整形は一部にナデとケズリが確認可能ではあるが粗雑である。また、摩耗等により内外面の整形は現状では確認できない。底部には製作時の植物圧痕が確認できる。

(2) 口縁部 (6～9)

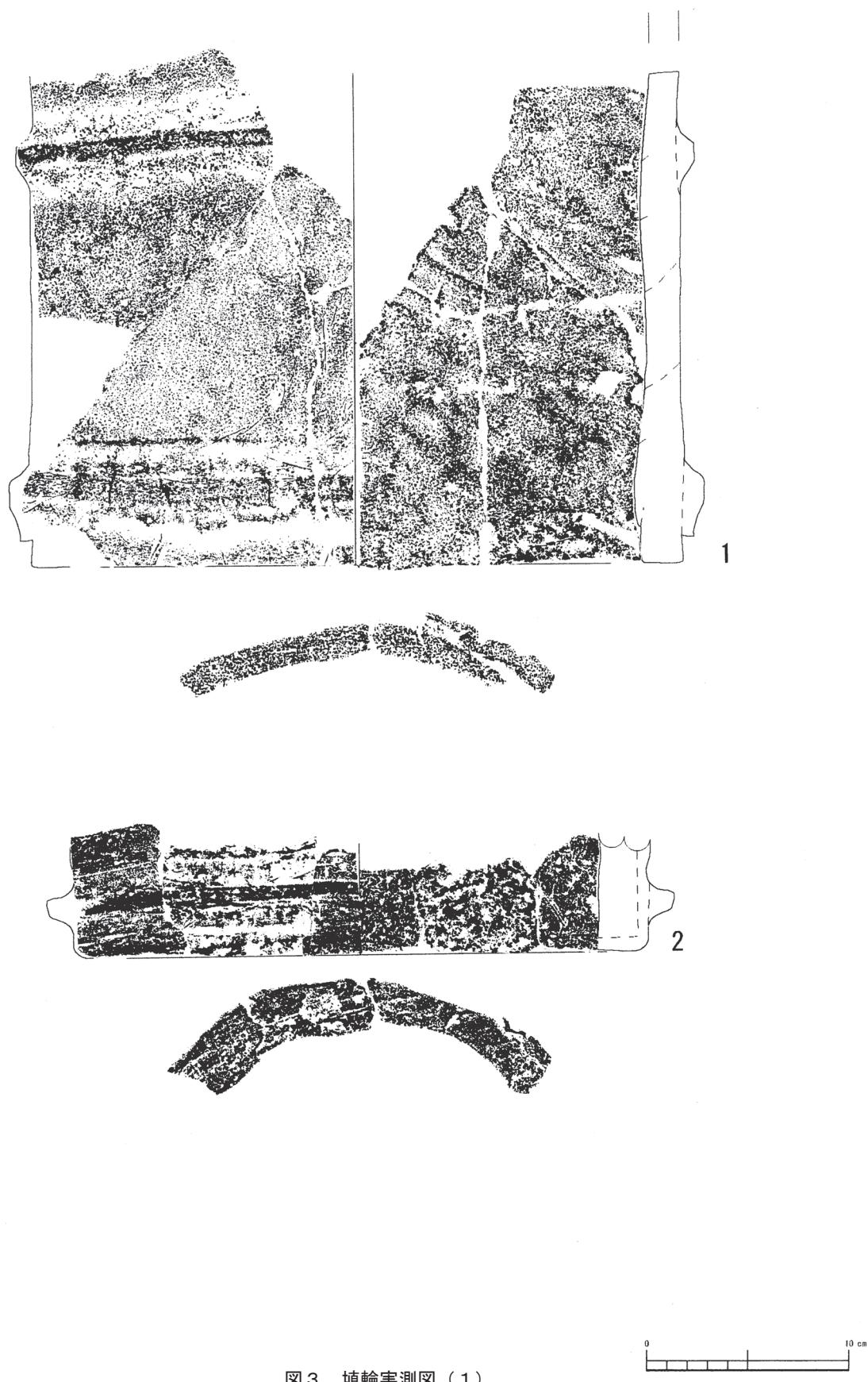


図3 墓輪実測図(1)

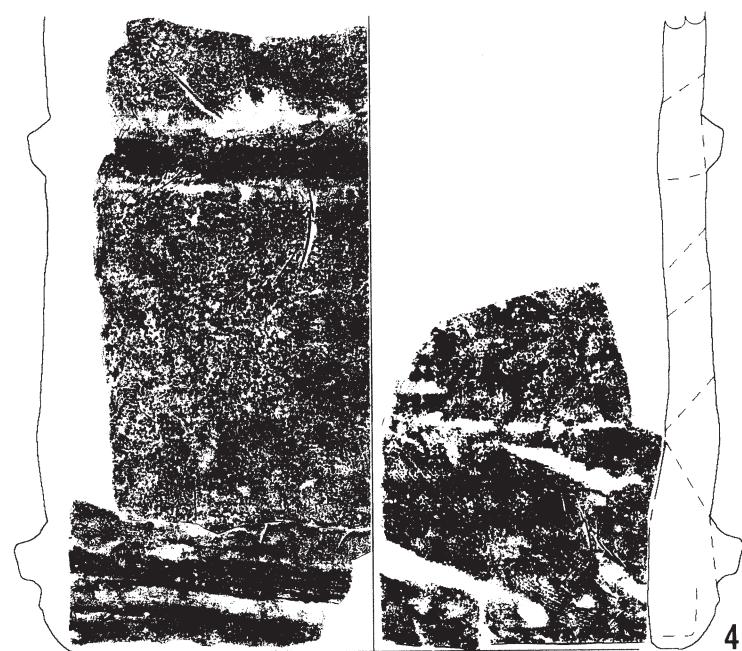
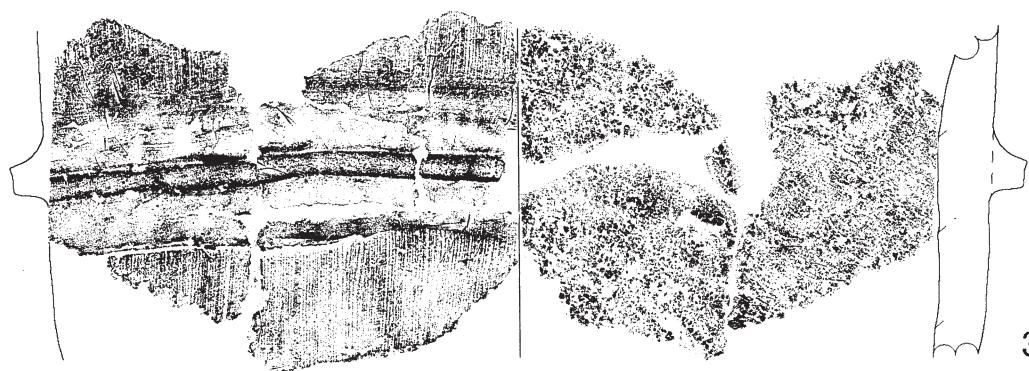


図 4 円筒埴輪実測図 (2)

口縁部の破片は非常に少なく、4点のみしか確認できなかった。他の遺跡において、低位置突帯と共に多く見られる折り返し口縁はみられない。4点の口縁部は、つまみだして口唇部に沈線を作ることで口縁部としている。6の口唇部には明瞭なつまみだしが確認できる。7と8は同一個体であると考えられ、口唇部に緩やかなつまみだしがみられる。6～8の断面形はL字である。9は口唇部にごく緩やかなつまみだしを持つものの、他の3点とは異なり、直立した立ち上がりを持つ。

(3) 胴部 (10～40)

最も多くの点数を確認した。焼成不良等により摩耗しているものもあるため、内外面の観察が困難な個体も存在する。細片が多く、接合できた個体は少なかった。ハケ状工具による整形が確認できる個体を観察すると、内外面で同様の工具を使用している。胴部破片の中には、内外面に焼成時に付着したと思われるススがみられる個体があった。胴部は点数が多いが、細片であることから本項において一点一点の事実記載はおこなわず、次章にてハケメの観察をおこなうこととした。

(4) 底部 (41～45)

底部のみの個体は5点である。41は内外面ともに摩耗が激しい。42は底部から第一段突帯までは約1.5cm、底部の厚さは約3.3cmである。内外面ともにハケ状工具で整形している。突帯は台形状で低い。底部に植物圧痕がみられる。43は底部から突帯までは0.8～1.2cm、底部の厚さは約3cmである。44は内外面ともに摩耗が激しい。底部から突帯までは2.0～2.5cm、底部の厚さは約3cmである。45は底部から突帯までは約2cm、底部の厚さは約2.5cmである。突帯の断面形が三角状である。41・43・44は、突帯の貼り付けが非常に粗雑であり、突帯の形が保たれていない。突帯下部の粘土貼り付けが特に粗雑である。

(5) 形象埴輪 (46～53)

円筒埴輪と認められない個体が8点ある。全点が形象埴輪といえるかは今後検討を行う必要がある。またこれらの形象埴輪の可能性を持つ個体で底部が残存しているのは皆無である。46、48は中央部に膨らみを持ち、反対に47は中央に向かったすぼまりをみせるといったそれぞれ円筒埴輪とは異なった形状を持つことから形象埴輪であると考えられる。50は三輪玉と考えられる円形状の剥離がみられることから大刀形埴輪の可能性がある。49も同様の形状を呈しているので、同器種の埴輪であろう。

4 分析

今回、報告した資料で2項目について述べていく。1点目はハケ状工具について、2点目は低位置突帯埴輪の基底部から第一突帯までの高さについてである。

まず、ハケ状工具についてである。ハケ状工具での整形が40点の個体で確認できた。その内35点についてハケメ幅の観察が可能である。低位置突帯埴輪が出土した古墳においてハケメによる分析をおこなった例が少ないため、まず古墳内での埴輪工人集団の想定をすることを目的として、ハケメの幅を計測し、分類をおこなう。埴輪のハケメの同工品論については城倉正祥の研究が詳しい（城倉2009）。城倉は、母材から切り出して刷毛を製作し、使用実験をおこなっている。その中で、「木目の走り方は近接した場所においても、歪みが存在する」、「同一工具においても、柾目であることを強く意識して製作された工具でない限りは、木目の現れ方に変異の幅があるということになる」ことを指摘している。そのためハケメ分析には、属性分析とハケメの観察が必要であるとしているが、今回は簡易的な肉眼による観察をした。全個体が同一仕様で計測をおこなえるよう2.0cm幅の中で、ハケメが何本かを計測した。その結果、2.0cmあたりのハケメは（A）7～9本、（B）12～13本、（C）16～18本と3種類に分類できた。各個体のハケメについては観察表に記

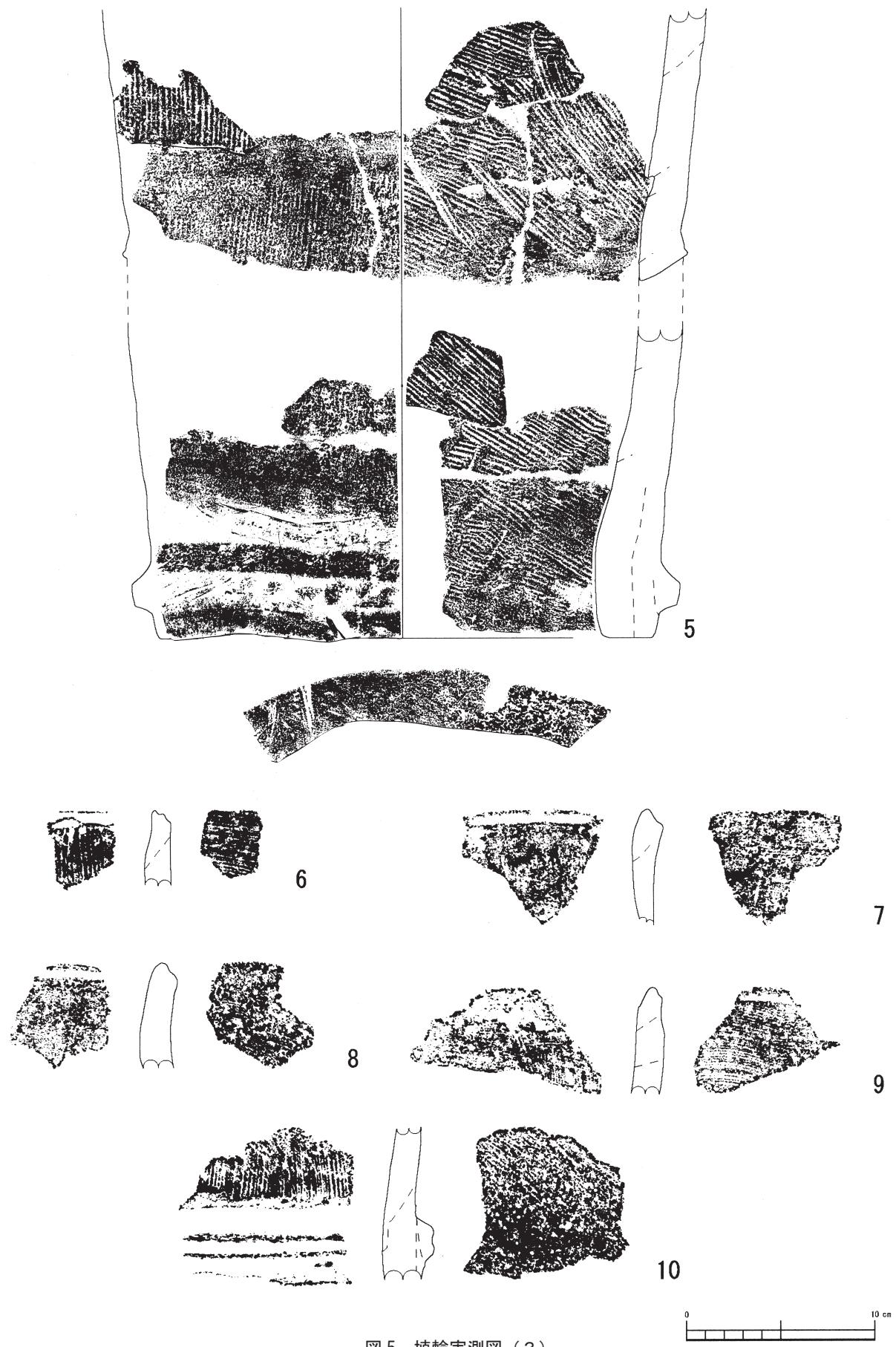


図 5 墳輪実測図 (3)

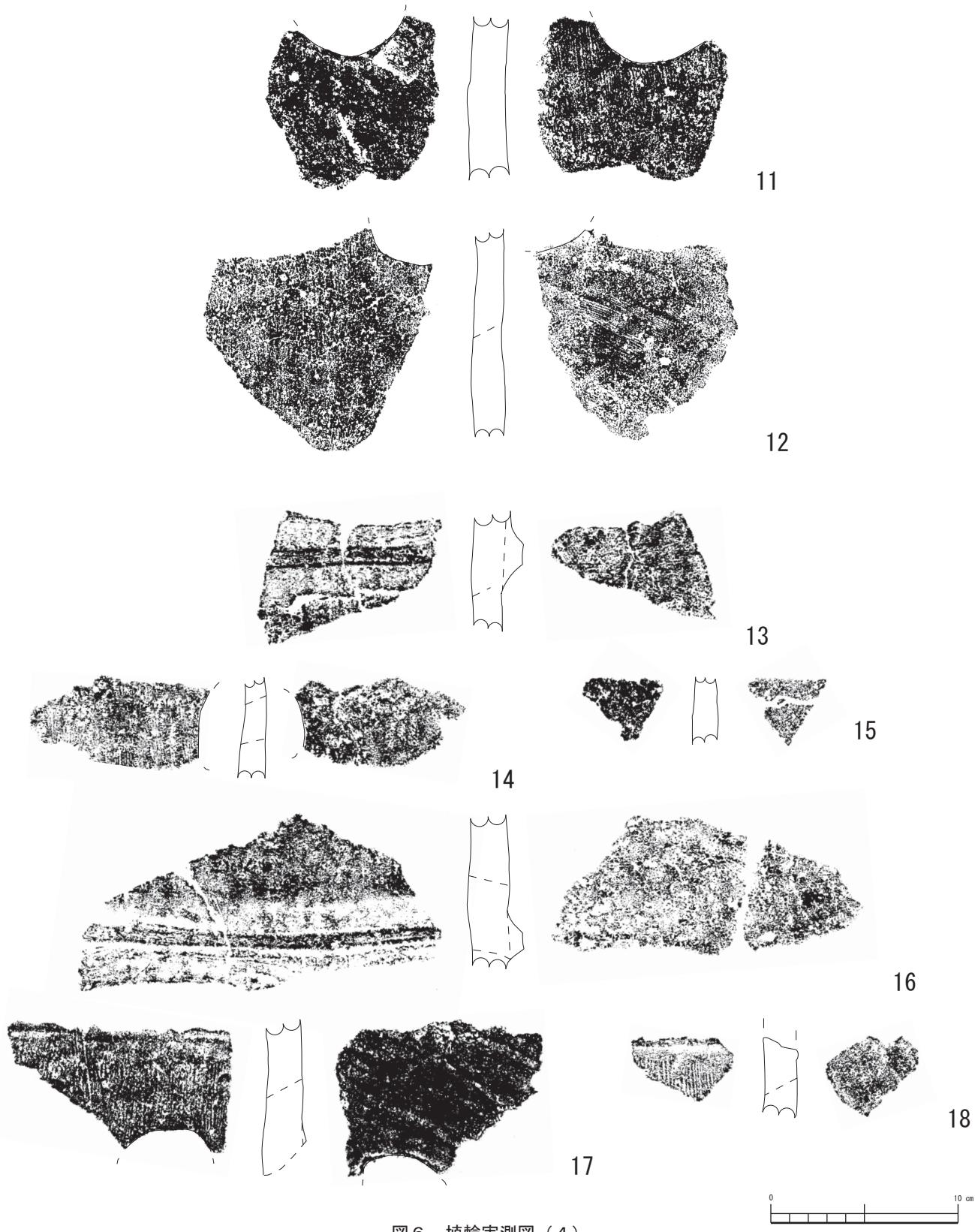


図6 墓輪実測図 (4)

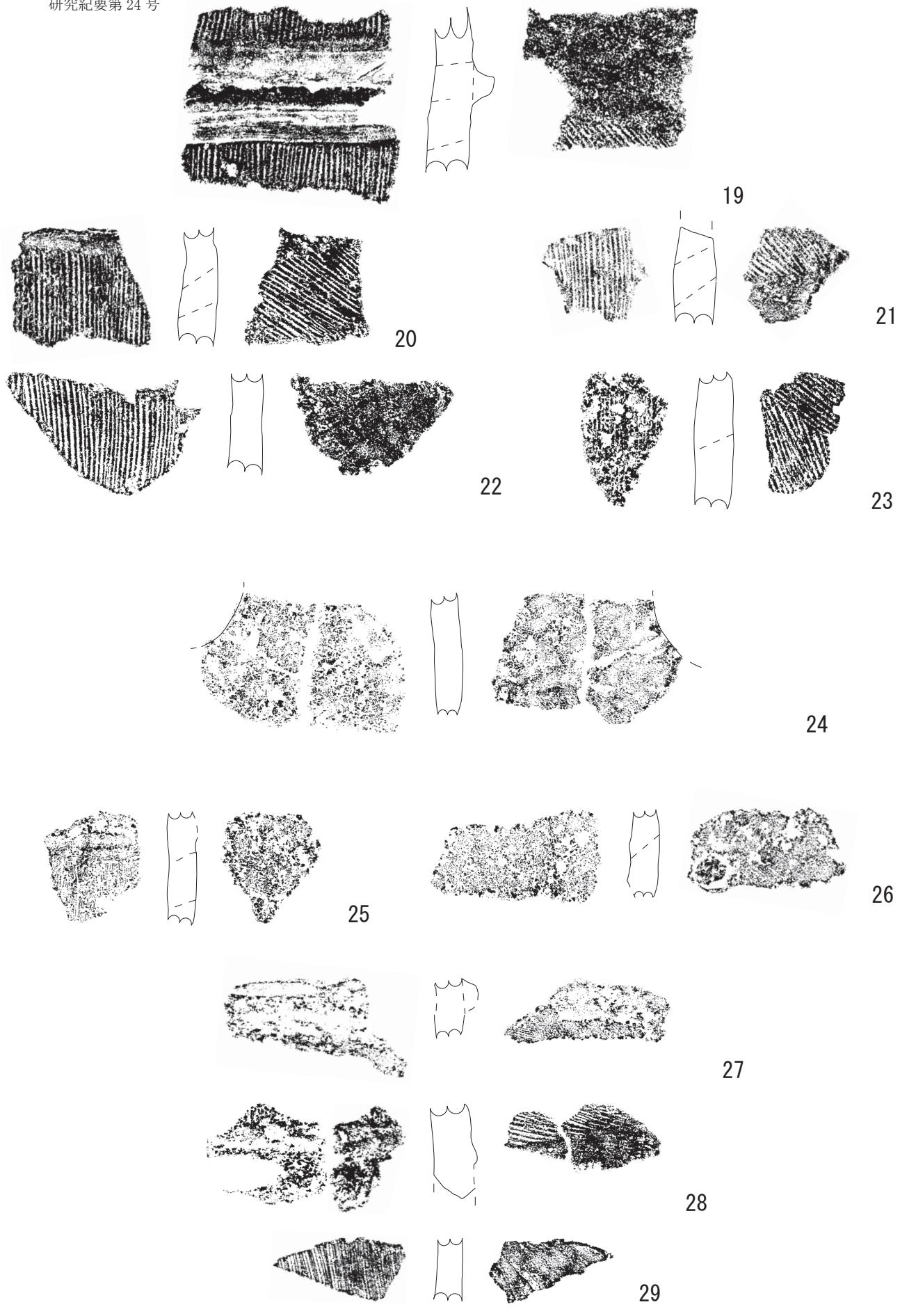


図 7 墓輪実測図 (5)

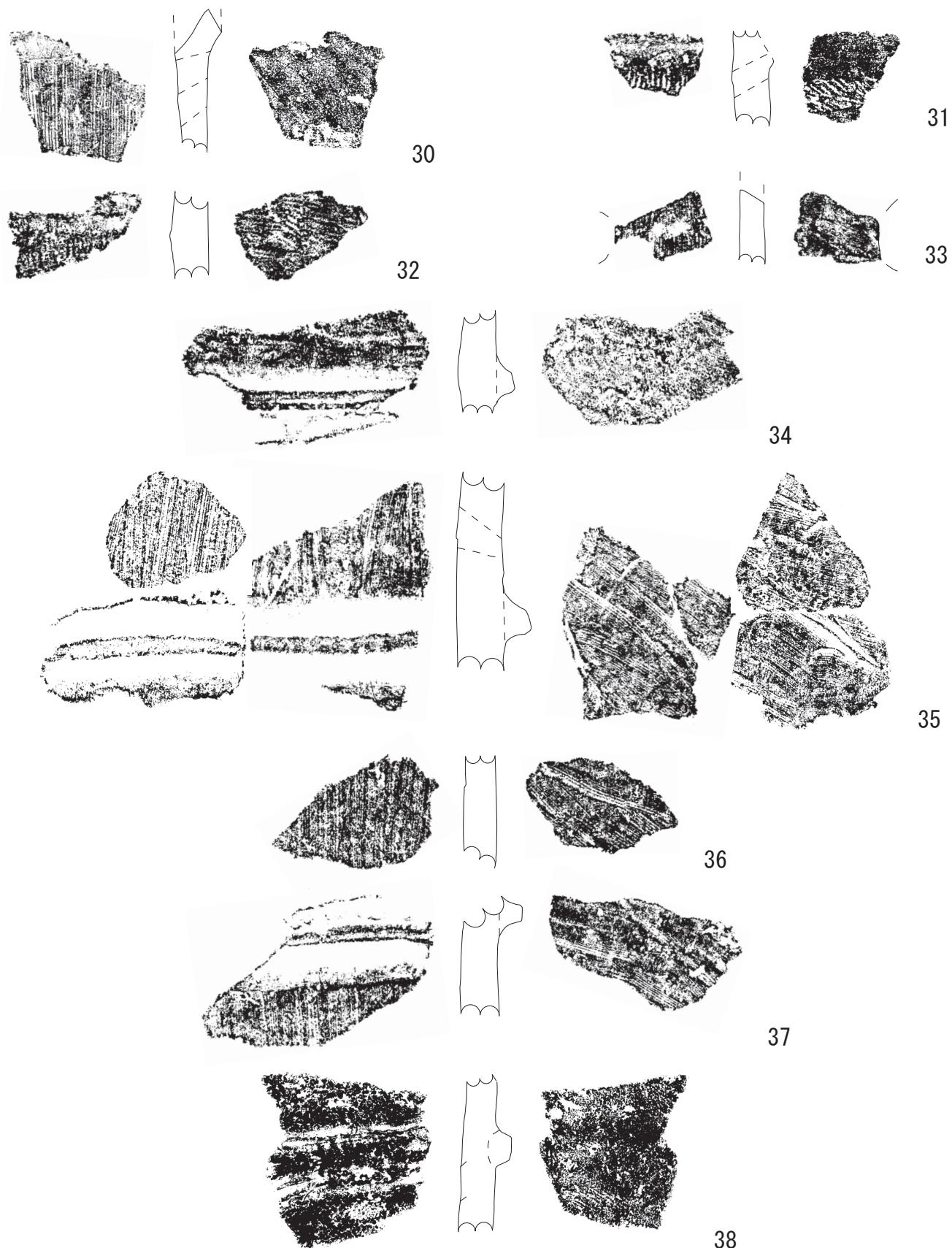


図8 墓輪実測図(6)



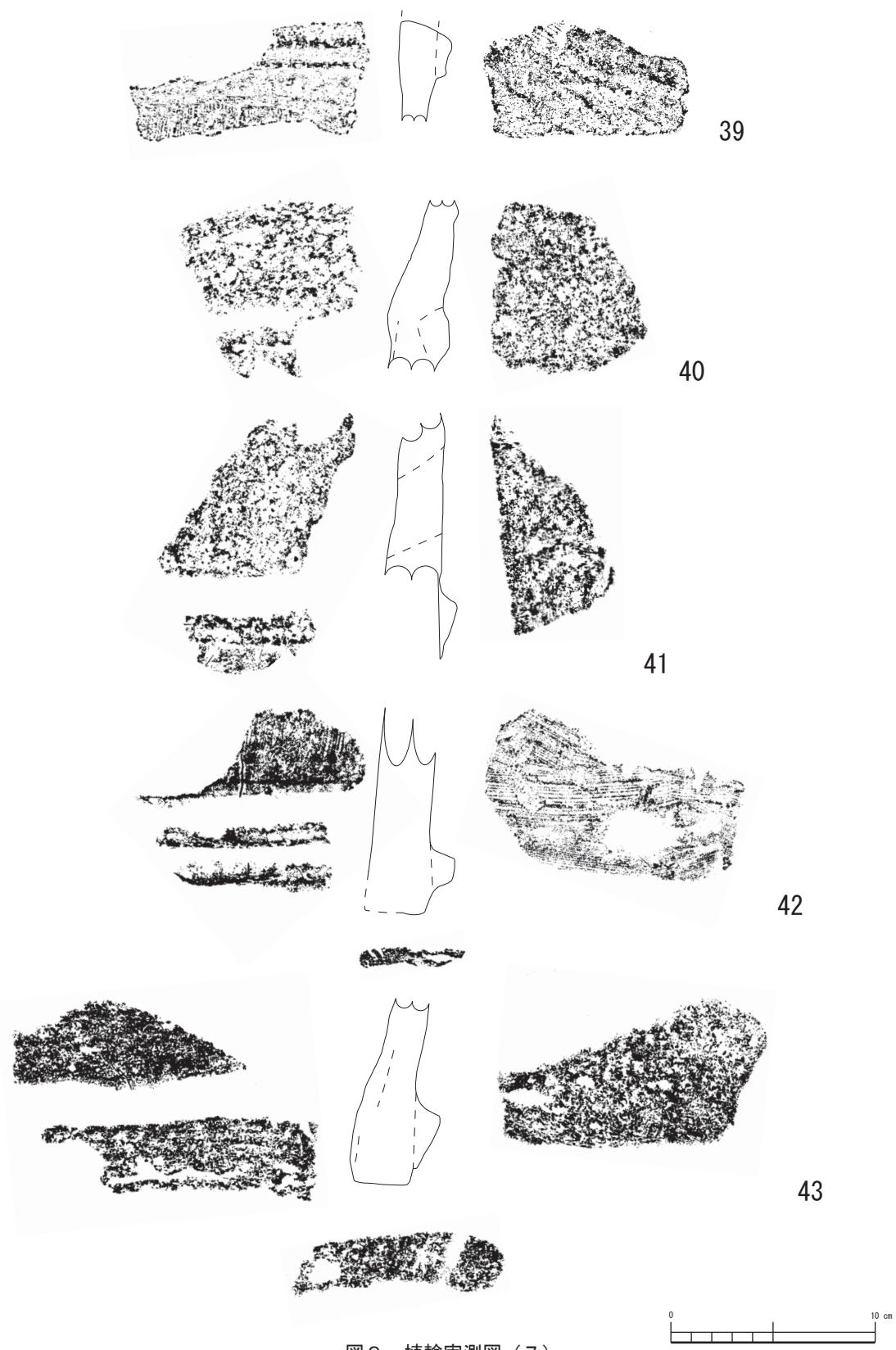


図9 墳輪実測図 (7)

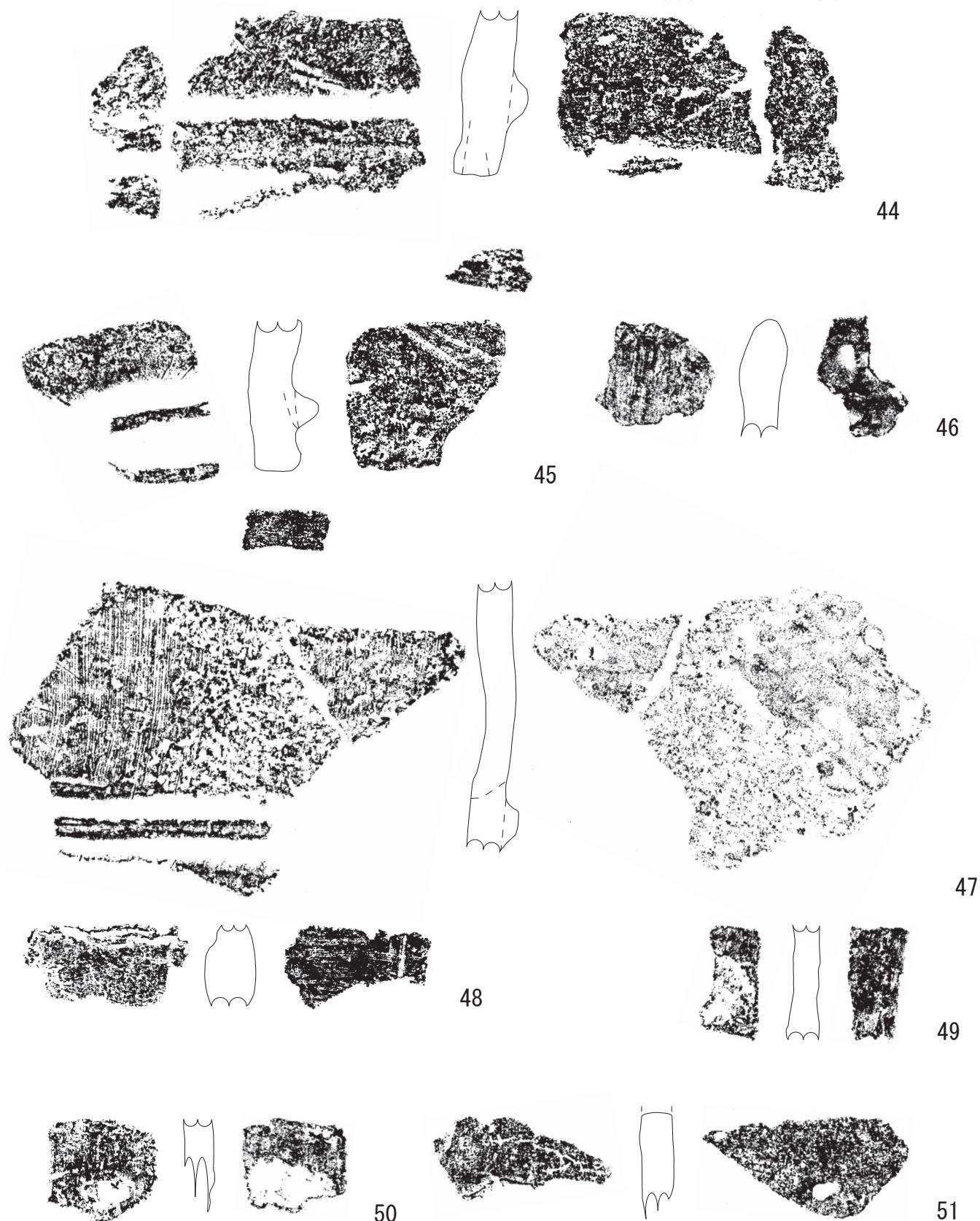


図10 墓輪実測図 (8)



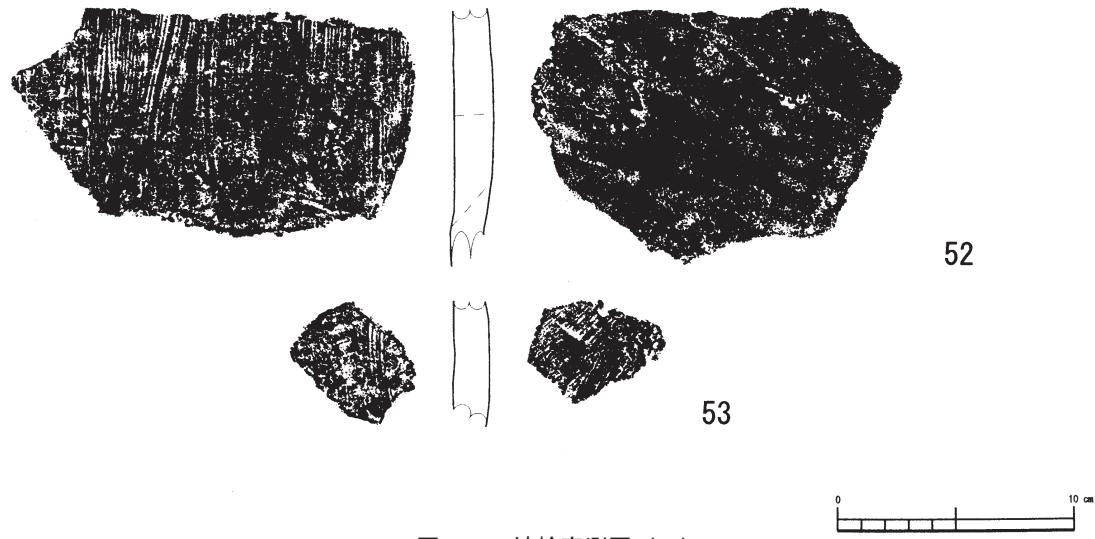


図11 増輪実測図(9)

表1 増輪観察表

図版番号	器種	計測値	胎土	色調		焼成	特徴	工具	備考
				外面	内面				
1	底部	底部 径 (26.4) cm	白色・赤色粒、5mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のハケ・底部近くではナデーナナメ方向のハケ 底部製作時の植物圧痕 内外面に若干のスス	A	
2	底部	底部 径 (27.4) cm	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	内面ナナメ方向のハケ、底部製作時の植物圧痕 ススと考えられる黒色の付着物あり	—	35, 42 と同一個体か
3	胴部	胴部 径 (35.8) cm	砂粒、赤色粒	10YR5/3 (にぶい黄褐色土)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	(外)過焼成 (内)不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け→ナデ、内面ナナメ方向のケズリ	C	
4	底部	底部 径 24.4-25 cm	砂粒、赤色粒、2mm以下の透明粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面ナナメ方向のハケ、底部付近はユビオサエ後、ハケで調整 底部にケズリで調整した痕跡あり	C	
5	底部	底部 径 (32.0) cm	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	2.5YR4/4 (明赤褐色)	2.5YR4/4 (明赤褐色)	やや不良	外面ナデ・ケズリ、内面ナナメ方向のケズリ 突帯の高さが一律ではない 底部は板状の粘土組み合わせで成形	—	
6	口縁部		砂粒、黒色粒、3mm以下の礫	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ、内面横ハケ 口唇部のつまみ出し	A	
7	口縁部		砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	口唇部に緩やかなつまみだし	—	8と同一個体か
8	口縁部		砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	不良	口唇部に緩やかなつまみだし	—	7と同一個体か
9	口縁部		砂粒、赤色粒、2mm以下の透明粒、3mm以下の礫	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面ハケメ→板状工具によるナデ、内面横ハケ→ナナメハケ	B	
10	胴部		砂粒、赤色粒、3mm以下の透明粒、5mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	不良	外面縦ハケ、内面緩やかなユビオサエ	B	37, 39と同一個体
11	胴部	スカシ孔 径 (6.2) cm	砂粒、5mm以下の礫	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のハケ・ケズリ スカシ孔	B	
12	胴部		砂粒、赤色粒、6mm以下の礫	2.5YR5/6 (明赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ、内面ケズリもしくはナデで調整 後、一部ナナメ方向のハケ	C	
13	胴部		砂粒、赤色粒、2mm以下の透明粒、5mm以下の礫	2.5YR4/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面一部ナナメ方向のハケ	△	
14	胴部		砂粒、赤色粒	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のケズリ スカシ孔	B	
15	胴部		砂粒、5mm以下の赤色粒	2.5YR5/6 (明赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面ナデ、内面製作時と思われる圧痕	—	
16	胴部		砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR4/3 (褐色)	(外)やや不良 (内)不良	外面ケズリ後突帯貼り付け、内面ナナメ方向のケズリ	—	
17	胴部	スカシ孔 径 (5.2) cm	砂粒、赤色粒、透明粒	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	やや不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のケズリ スカシ孔	B	
18	胴部		砂粒、赤色粒	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ、内面緩やかなケズリ	B	

19	胴部	砂粒、赤色粒、透明粒、5mm以下の礫	2.5YR5/6 (明赤褐色)	7.5YR4/3 (褐色)	やや不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面上部緩やかなケズリ・下部ナナメ方向のハケス付着	A	
20	胴部	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面ナナメ方向のハケ 内外面にススの付着	A	
21	胴部	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のハケスカシ孔	A	
22	胴部	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	7.5YR4/3 (褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向の緩やかなケズリ	A	
23	胴部	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ、内面縦ハケ→ナナメ方向のハケ	A	
24	胴部	砂粒、赤色粒、2mm以下の透明粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面ナナメ方向のケズリ一条、内面ナナメ方向のハケスカシ孔	△	
25	胴部	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け	C	
26	胴部	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	7.5YR4/3 (褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	内面ナナメ方向のハケ、制作時に付着した粘土あり	△	
27	胴部	砂粒、赤色粒、透明粒、5mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR4/4 (にぶい褐色)	不良	内面横ハケ・ナナメ方向のハケ突帯の剥離	B	
28	胴部	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面ケズリもしくはナデ→横ハケ	C	
29	胴部	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のケズリ	B	
30	胴部	砂粒、赤色粒、2mm以下の透明粒、5mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面ナナメ方向のケズリ	B	
31	胴部	砂粒、赤色粒、2mm以下の透明粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR4/3 (褐色)	やや不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面ナナメ方向のハケ後ケズリもしくはナデで調整	A	
32	胴部	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	7.5YR4/3 (褐色)	7.5YR4/3 (褐色)	不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面ナナメ方向のケズリ	A	
33	胴部	砂粒、透明粒、赤色粒	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	やや不良	外面縦ハケ、内面不明瞭な横ハケスカシ孔	B	
34	胴部	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	7.5YR5/3 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面調整後突帯貼り付け、内面ナナメ方向のハケ	B	
35	胴部	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	2.5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のハケ→ユビオサエ内外面共にススが付着(焼成時に付着か)	C	2, 42 と同一個体か
36	胴部	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向ハケメ 外面にススが付着(焼成時に付着か)	C	
37	胴部	砂粒、5mm以下の赤色粒、5mm以下の礫	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面ナナメ方向のハケ→横ハケ	C	
38	胴部	砂粒、赤色粒、7mm以下の礫	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	不良	外面縦ハケ後突帯貼り付け、内面緩やかなナナメ方向のハケとケズリ	△	
39	胴部	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のケズリ→ユビオサエで調整 突帯剥離	B	
40	胴部	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	不良	内外面共に摩耗が激しく確認できず	—	44 と同一個体か
41	底部付近 胴部	砂粒、5mm以下の赤色粒・礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	不良	内外面共に摩耗が激しく確認できず	—	
42	底部	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ?、内面ナナメ方向のハケ→ユビオサエ 底部制作時の植物痕跡。外面に一部ススの付着	C	2, 35 と同一個体か
43	底部	砂粒、赤色粒、7mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	不良	突帯幅6mm、板状工具でケズリ整形、突帯下部は明瞭な段がない。内面横ハケ	C	
44	底部	砂粒、赤色粒	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面は摩耗が激しく認識不可能、内面底面3.3cmまでユビオサエ	—	40 と同一個体か
45	底部	砂粒、赤色粒、5mm以下の礫	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	不良	外面ハケメは確認できないが突帯の下部をナデで貼り付けている、突帯の断面が三角である、内面ナナメ方向のハケ→ユビオサエ	—	
46		砂粒、赤色粒	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	不良	外面縦ハケ→ユビオサエ、内面横ハケ→ユビオサエ	B	○
47	スカシ孔 径(4.0)cm	砂粒、透明粒、3mm以下の礫	7.5YR6/4 (にぶい橙色)	7.5YR6/4 (にぶい橙色)	不良	外面縦ハケ、内面ユビオサエ 円形スカシ孔 ハケメ剥落 やや強く外反する	B	○
48		砂粒、赤色粒	5YR4/2 (灰褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面横ハケ	A	○
49		砂粒、赤色粒	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	不良	ケズリで調整か。	—	○ 50 と同一個体か
50		砂粒、赤色粒	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面に剥落痕あり	—	○ 49 と同一個体か
51	スカシ孔 径(3.8)cm	砂粒、赤色粒、3mm以下の礫	2.5YR5/6 (明赤褐色)	5YR4/6 (赤褐色)	不良	突帯の貼り付けが平行ではない	—	○
52	スカシ孔 径(5.6)cm	砂粒、5mm以下の赤色粒、3mm以下の礫	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	不良	外面縦ハケ、内面ナナメ方向のハケメ→ユビオサエ 円形スカシ孔 一部分にすぼまりをみせる	△	○
53		砂粒、赤色粒	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	不良	外面ナナメ方向ハケ、内面横方向ハケ やや反りが認められる	B	○

※1 () は推定値

※2 表内の「○」は形象埴輪の可能性が指摘された個体

※3 「工具」のA～Cは本文中の分類による

△はハケメが一部確認できるが、分類が困難であるもの

表 2 低位置突帯埴輪出土

NO	遺跡名	市町村	墳形	高さ (cm)	備考
1	愛宕塚古墳	栃木市	前方後円墳	1 ~ 2.5	
2	口明塚古墳	足利市	円墳	3.2~4	
3	小峯山 2 号墳	佐野市	円墳	2	表採
4	中山 8 号墳	佐野市	円墳	-	
5	一瓶塚稻荷神社古墳	佐野市		3	表採
6	佐野城	佐野市		3	遺構外
7	唐沢ゴルフ場埴輪窯跡	佐野市	窯跡	1~3	
8	米山東古墳	佐野市	方墳	-	
9	黒袴台	佐野市		2.5	遺構外
10	岩舟甲塚	栃木市	円墳	2cm 前後	
11	豊岡遺跡	栃木市		2cm 前後	遺構外
12	観音山古墳	小山市	前方後円墳	2.6	
13	判官塚古墳	鹿沼市	前方後円墳	1.5	
14	羽生田茶臼山	壬生町	前方後円墳	2cm 前後	
15	羽生田富士山	壬生町	前方後円墳	2cm 前後	
16	足尾塚古墳	小山市	円墳	2	
17	国分寺甲塚	下野市	帆立貝	2	
18	星の宮神社古墳	下野市		2cm 前後	表採
19	みぶ車塚	壬生町	円墳	-	
20	横塚古墳	下野市	前方後円墳	2cm 前後	
21	橋本古墳	上三川町	円墳	2	
22	大和久古墳	那須烏山市	不明	2.2	出土古墳不明

※1 「-」は報告書での記載は確認できるが、実際の資料は確認できないもの

※2 みぶ車塚遺跡は、小森哲也氏ご教示による

載している。(A) 類 10 点、(B) 類 15 点、(C) 類 10 点で最も (B) 類が多かった。肉眼での簡易な観察だが、ハケメの幅がここまで分類できるということは、3人の工人もしくは、集団内のグループが 3 グループあつたと推定できよう。また低位置突帯埴輪であることが確実な底部では、摩耗が激しく見えない個体が多いが、(A) 類と (C) 類のみ観察できて、(C) 類が多い点が特徴である。低位置突帯埴輪を製作していたのは特定の工人であったのだろうか。そして資料全体でみると墳丘規模に対して、多くない人数での埴輪製作を想定することができる。しかし、今回の報告資料では点数も少なく、細片であり、西側裾部分の資料という限られた条件であるため今後の成果によっては、異なる見解がみえる可能性が大いにあるだろう。

2 点目は、低位置突帯の定義について分析したい。註 2 にもある通り、昭和 55 年に森田久男・鈴木勝が発表した低位置突帯の定義が、現在まで踏襲されている。しかし、定義の中にある底部から第一段突帯までが「5 cm」という数字は、どこから導き出されたのか、そして今までに出土している低位置突帯埴輪のそれと合致するものなのかを考えたい。まず報告資料内の低位置突帯についてだが、底部～突帯までは 5 cm 前後という基準の中では 1.5 ~ 3.6 cm という極めて低い位置にある。それでは他の遺跡出土例と比較して高さに違いが出るのかを検討したい。現在までに栃木県内で出土している低位置突帯埴輪の底部から第一段突帯までを、既出の報告書及び論文を用いて計測してみた。その結果が、表 1 である。栃木県内の低位置突帯埴輪は高さ 3 cm 前後に収まるものが、ほとんどであった。また佐野市以西の埴輪の第一段突帯の高さ

が、以東のそれより比較的高く、出土する古墳の墳形は円墳が多い。佐野市以東の低位置突帯埴輪が出土する古墳の墳形は前方後円墳が比較的多いようにみられる。そこで佐野市・足利市に近接している群馬県の低位置突帯の様相はどのようにになっているか考える必要がある。新山保和が、群馬県出土の低位置突帯を集成している（新山 2007）。新山は、低位置突帯埴輪の第一段の高さが、「基底部にあるもの」、「3 cm 前後」、「5 cm 前後」で分類し、それぞれを I ~ III 類としている。そこで愛宕塚古墳と同じ低い突帯である I 類を抽出すると、富岡市・安中市・藤岡市・高崎市・玉村町・前橋市・太田市と群馬県中央部からまんべんなく出土しているようにみえる。しかし I 類出土古墳数は多くはない。また、玉村町小泉大塚越 3 号墳出土埴輪のように I 類～III 類まで出土している例も多くあり、I 類だけ出土している古墳は限られてくる。愛宕塚古墳の低位置突帯埴輪は 2 cm 前後のものが多い。基底部から第一段突帯までの高さで計測箇所が異なる場合、個々の高さで 1 cm 弱の前後ある可能性がある。今回は、基底部から突帯の下部で計測をおこなった。その結果、新山分類の I 類と II 類の中間であろう個体がでてきた。また、愛宕塚古墳の低位置突帯埴輪は 2 cm 前後の埴輪が多い。これは、群馬県及び栃木県の既出資料の中では比較的に低い低位置突帯埴輪であるといえるであろう。しかし、前述したが計測箇所が異なる可能性もあるため、今後は同様の基準を設けて資料の観察をする必要がある。また愛宕塚古墳の資料では、底部の第一段突帯は以下の 3 種類に分類できた。(a) 台形状の突帯、(b) 三角もしくは幅が非常に狭く高い突帯、(c) 突帯上部はナデ等の調整が確認できるが下部については粗雑なつくりで、形を成してない突帯。それぞれ (a) 類—2・4・5・42、(b) 類—1・43・44、45、(c) 類—41 が分類される。新山の論文でいう I 類に近い形状は愛宕塚古墳資料だと (c) 類といえるが、そのまま「基底部になる」とはいえないと考える。新山は I ・ II 類を「本来の低位置突帯埴輪」、III 類を「低位置突帯埴輪類型」としているが、今回の検討で栃木県内の低位置突帯埴輪においても 3 cm 前後に収まることから、栃木県内にもこの考え方方が当てはまると考える。栃木県内では口明塚古墳や一瓶塚稻荷古墳、佐野城、唐沢ゴルフ場埴輪窯跡の一部などでは 3 cm を超える低位置突帯埴輪が検出している。そのため、佐野市以西の県西部では低位置突帯埴輪類型が多く栃木県内でも地域差が出ると考えられる。

5 考察

前項までに愛宕塚古墳出土埴輪の資料報告をおこなった。低位置突帯埴輪は、従来の研究から 6 世紀中葉から後葉に位置付けられる（小森 2015）。愛宕塚古墳は低位置突帯埴輪以外に出土していないため、帰属する年代は 6 世紀中葉から後葉（MT85 ~ TK43）としておく。今後墳丘測量の実施や、以前開口されていた石室の精査・検討をおこなうことが課題である。また今回報告では、点数が少ないが、低位置突帯埴輪で既存の集成にない地点の報告ができたことが成果である。さらに研究に寄与するためには、低位置突帯埴輪だけではなく、栃木県全体の古墳編年や、様相の中で位置付けるために検討をおこなうことに加え、胎土分析で産地同定をおこなうべきである。またハケメも他遺跡と比較して分析をおこなうべきであった。最後に、分析で言及した低位置突帯埴輪について述べる。低位置突帯埴輪は大型品の歪みの集成、基底部の歪みを隠す低位置の突帯の貼り付け、底部調整、倒立技法によるものと製作理由について多くの説が唱えられている。今回の資料を概観すると、底部に突帯をつけたままあまり調整をおこなわない例がみられた。これは底部を意識しており、突帯をつけることに意義があったのではないか。愛宕塚古墳の低位置突帯は埴輪の大型化に伴う底部調整という技法の一つとしても考えられる。その点から考えると佐野市以西の高い第一段突帯はより丁寧な底部調整で、以東のものは突帯を貼り付けることに意義があったのではないかだろうか。しかしこの考察を立証するためには、まず低位置突帯埴輪出土古墳の編年をおこない、時期差か地域差の検討と、個体

一点一点の調整方法を観察する必要がある。類例を待ちつつ、それらについては今後検討をおこなうとする。

おわりに

本資料を報告するにあたり、資料の借用及び掲載等を快く許可して頂いた栃木市教育委員会に感謝致します。また、本稿執筆にあたり、下記の方々から勉学足らない我々に、多大なご教示とご協力をいただきました。この場をお借りして、御礼申し上げます。(敬称略)

秋元 陽光 石橋 宏 内山 敏行 賀来 孝代 小林 青樹 小森 哲也 高見 哲士 塚本 師也
中村 耕作 中村 享史 栃木県古墳勉強会

註

- (1) 本古墳の名称は、「愛宕神社古墳」、「愛宕塚古墳」、「愛宕遺跡」などがあるが、栃木市が使用している表記である「愛宕塚古墳」を使用する。
- (2) 低位置突帯埴輪とは、従来の研究において「器形の大小にかかわらず、基底面からほぼ 5 センチ以内に第一段凸帯がつくもの」(森田・鈴木1980)とされており、本論文もこの定義を前提とする。
- (3) 水洗・注記作業に関しては、國學院大學栃木短期大学において中村耕作専任講師の授業の一環でおこなった。
- (4) 愛宕塚古墳が立地する赤津川・永野川流域の古墳群の墳丘・石室の測量、栃木県内の埴輪の胎土分析を含めた研究をおこなっている栃木県古墳勉強会の皆様にご教示いただいた。

参考文献・引用文献

- 秋元陽光・大橋泰夫・水沼良浩 1989 『国分寺町甲塚古墳調査報告』『栃木県考古学会誌』第 11 集、栃木県考古学会
pp. 181-198
- 秋元陽光 2016 『栃木県赤津川・永野川流域の古墳群』『第 21 回 東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム 群
集墳展開の共通性と地域性 - 王権・地域首長と群集墳被葬者 - 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会、
pp. 21-35
- 市橋一郎ほか 1996 『口明塚古墳発掘調査報告書』足利市埋蔵文化財調査報告書第 31 集、足利市教育委員会文化財保護
課
- 大川清ほか 1976 『岩舟町畠岡遺跡発掘調査報告書』栃木県教育委員会
- 太田嘉彦 2000 『佐野市指定史跡・名勝 佐野城跡（春日岡城）- 城山公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
佐野市埋蔵文化財調査報告書第 18 集、佐野市
- 大橋泰夫 1986 『星の宮神社古墳』『星の宮神社古墳・米山古墳』栃木県埋蔵文化財報告書第 76 集、（財）栃木県文化振
興事業団
- 江原英・大野淳史 2012 『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査・工事立会概要報告書 - 平成 21 ~ 23 年度緊急雇
用創出事業に係わる整理作業報告書 -』栃木県埋蔵文化財調査報告第 344 集、栃木県教育委員会・（財）とち
ぎ未来づくり財団、pp. 3-18
- 君島利行 1998 『富士山古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第 14 集、壬生町教育委員会

- 小森哲也・田代隆 1985「横塚古墳」『石橋町史』第1巻 資料編（上）、石橋町、pp. 55-101
- 小森哲也 2001「4 関東北部における低位置凸帯の円筒埴輪」『シンポジウム 繩文人と貝塚 関東における埴輪の生産と供給』日本考古学協会・茨城県考古学協会、pp. 136-143
- 小森哲也 2015『東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究』六一書房
- 坂詰秀一ほか 1987『大和久古墳群発掘調査報告書』南那須町教育委員会
- 佐野市史編さん委員会 1975「米山東古墳」『佐野市史』資料編1、佐野市、pp. 97-120
- 城倉正祥 2009『埴輪生産と地域社会』学生社
- 田沼町史編さん委員会 1984「一瓶塚古墳」『田沼町史』第3巻 資料編 原始古代・中世、田沼町、pp. 175-187
- 都賀町史編さん委員会 1989『都賀町史 歴史編』都賀町 pp. 22
- 津野 仁 2012『甲塚古墳-重要遺跡範囲確認調査-』栃木県埋蔵文化財調査報告第343集、栃木県教育委員会・（財）とちぎ未来づくり財団
- 津野 仁・藤原 哲 2015『栃木県重要遺跡現況確認調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告第372集、栃木県教育委員会・（公財）とちぎ未来づくり財団、pp. 86
- 栃木市教育委員会 2015『栃木市遺跡分布地図』栃木市教育委員会
- 中村享史 2015「栃木県域の古墳編年」『東北・関東前方後円墳研究会第20回大会シンポジウム 地域編年から考える-部分から全体へ-発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会、pp. 107-117
- 新山保和 2007「群馬県出土の低位置突帯埴輪」『研究紀要』第25号、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp. 45-60
- 新山保和 2007「栃木県出土の低位置突帯埴輪」『古墳文化II』國學院大學古墳時代研究会、pp. 71-83
- 橋本澄朗ほか 2001『黒袴台遺跡』栃木県埋蔵文化財報告書第261集、栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 矢島俊雄・茂木克美 1989『小峰山遺跡』佐野市教育委員会
- 安永真一 2001「判官塚古墳」『鹿沼市史』資料編考古、鹿沼市、pp. 244-248
- 森田久男・鈴木 勝 1980「栃木県における後期古墳出土の埴輪の一様相-最下段における「低位置凸帯埴輪」資料の紹介-」『栃木県史研究』第19号、栃木県教育委員会、pp. 71-86
- 森田久男 1981「八 円筒埴輪」『小山市史』資料編原始・古代、小山市、pp. 779-810
- 山越 茂 1979「判官塚古墳」『栃木県史』資料編考古2、栃木県、pp. 501-505

